447 各種疾患における食道動態シンチグラフィーの有用性の検討

相澤信行，明石恒浩，原芳邦（茅ケ崎徳洲会病院内科）
三井民人，守谷孝伸（同　放）
鈴木豊（東海大　放）

各種疾患における食道動態シンチグラフィーの有用性につき検討した。対象は、健常成人38例、食道炎様症状を呈した者55例、慢性閉塞性肺疾患24例、狭心症13例、脳血管障害後遺症7例、糖尿病7例、計144例である。方法は、^{99m}Tc－DTPA　0.3mCiを嚥下させ以後15秒毎に40回嚥下運動をくり返させた。食道に関心領域をとりこの時間放射能曲線を作成し、t回目のクリアランス率CtをCt＝(Emax－Et)／Emax×100 (Et：t回目の15秒間の放射能、Emax：Etの最大値）とし、クリアランスカーブを作成した。各疾患毎にこの平均値を求め特徴的なパターンを得た。また食道運動機能低下例では、薬剤投与前後のクリアランスカーブの変化を求めた。本検査は簡便かつ安全でありより軽度の食道運動機能低下例でも検出し得ると考えられ、各種疾患における食道運動機能についてスクリーニング検査となりうると考えられた。また、薬物の食道運動に及ぼす効果の判定にも有用であると考えられた。

448 逆流性食道炎の診断における胃食道シンチグラムの有用性の検討 — 他法との比較

野口雅裕*，佐々木康人**，青柳泰司*，金子稜威雄*，成木行彦***，大塚幸雄***，三浦慶和****，丸山雄三****
（東邦大　放*，群大　核**，東邦大　一内***，同核****）

近年消化器疾患の画像診断は，CT, USの急激な台頭により核医学検査，特に肝シンチグラム件数の減少を招来しつつあるが，一方核医学機能検査法が注目されている。我々は胸やけ，逆流，胆汁呕吐等の症状を訴える症例に，Malmudらの開発した胃食道シンチグラム法を若干修正施行し，本法と上部消化管造影および内視鏡検査の結果とを対比し，本法の有用性の検討を行なった。

方法はTc－99m－スズコロイド1mCiをオレンジジュース250mlに十分混和後，飲用させ10分間立位前面イメージを撮影し,次いで腹帯を用い背臥位で20mmHgずつ100から120mmHgまで加圧し経時的に上腹部〜胸部前面イメージを撮影した。またデータ処理装置を用い，時間放射能曲線を作製した。

その結果13例中5例に陽性所見の食道への逆流を認めた。本法と上部消化管造影および内視鏡検査の結果を比較検討し，本法のsensitivityの高さが認められた。漸次症例数を増やし，術前・術後ならびに薬剤による治療効果判定にも応用したいと考える。

449 ^{111}In-RBCによる消化管出血の描出

安部哲太郎、斉藤　宏、野口英三、西野正成
請井京子、亀山裕司、佐久間貞行（名古屋大　放）
堀田知光　（名古屋大　一内）

核医学検査による消化管出血イメージングには、^{99m}Tc-コロイド法、^{99m}Tc-RBC法等があるが、それぞれ問題を含んでおり、出血部位の描出を困難にしているのが現状である。

そこで、今回^{111}In-oxine標識赤血球により出血部位の描出について検討した。

その結果　1.^{111}In-oxineは赤血球への結合が強く標識率も高い　2.遊離した^{111}Inは消化管へ排出されない　3.^{111}In-RBCは静注後4〜5日迄追跡が可能である。

^{51}Crにより腸管内出血が確認され、他検査に於て出血部位が不明の患者4名に^{111}In-RBC法を施行した。4名中2名は1時間後に、2名は24時間後のイメージで出血部位の描出が可能であった。

以上、^{111}In-RBCは特に間欠性の消化管出血イメージングのトレーサーとして従来のものと比べ優れており、消化管出血部位の描出に有用であった。

450 腹部術後感染症におけるIn－111標識白血球の評価

宇野公一，今関恵子，有水　昇（千大　放）
植松貞夫（千大　放部）竜　崇正（千大　二外）
北方勇輔，荻野　尚，尾形　均（君津中央　外）

In－111標識白血球スキャンは腸管への集積がなく腹部の感染症の診断に有用とされる。術後の発熱持続患者にとつて膿瘍の状態を早急に診断し、適切な処置がとられる事が重要である。今回、術後膿瘍を疑つた症例にＣＴやＵＳと併用して本法を行ない本法の存在診断の評価や臨床上の有用性等を比較検討した。
ＣＴやＵＳは簡単に行なえる検査法としてＲＩと同様に非侵襲的検査法であるが、かかる症例ではしばしば腸管麻痺を伴ない消化管ガスのため診断不能となる症例も少なくない。この様な場合本法は病巣の範囲や活動性を診断するのにすぐれていた。しかし緊急性や施設等で本法は制限をうける問題点も残されている。

Presented by Medical*Online